Research Institute for World History

Newsletter

No. 10　April 2007

CONTENTS

1. 浅田進史「第 4 回世界史懇話会報告
Susanne Weigelin-Schwiedrzik 氏　中国史と世界史
—普遍性と特殊性のはざまの 20 世紀中国の歴史叙述—」

2. 南塚信吾「第 4 回世界史懇話会報告（補足）」

3. 松本 通孝「特集『世界史教育は不要か』緊急アンケートを読んで」

4. Web 世界史「Bridging World History」

5. 世界史研究所からのお知らせ

http://www.npo-if.jp/riwh/

発行：NPO-IF 世界史研究所
千葉大学文学部史学科西洋史研究室

RIWH　npo-if

世界史研究所「ニューズレター」第10号　2007年4月

第 4 回世界史懇話会報告

Susanne Weigelin-Schwiedrzik 氏

中国史と世界史—普遍性と特殊性のはざまの 20 世紀中国の歴史叙述—

浅田 進史

▲写真右：ズザネ・ヴァイゲーリン＝シュヴィードルツィク氏
写真左：南塚信吾氏

2007 年 1 月 15 日（月）、法政大学市ヶ谷キャンパス 80 年館 7 階大会議室 1 にて、オーストリア・ウィーン大学東アジア研究所教授、ズザネ・ヴァイゲーリン＝シュヴィードルツィク（Susanne Weigelin-Schwiedrzik）氏の報告「中国史と世界史 — 普遍性と特殊性のはざまの 20 世紀中国の歴史叙述 —」（World History and Chinese History: 20th Century Chinese Historiography between Universality and Particularity）と同報告をめぐる討論が行われた。本懇話会の主催は、NPO–IF 世界史研究所および 1980 年代史研究会である。報告者は 1989 年よりドイツ・ハイデルベルク大学で教授職に就き、1990 ～ 1999 年まで同大学中国学セミナー長を務め、2002 年より現職にある。その研究は多岐にわたるが、主たる関心は 20 世紀中国における歴史叙述であり、これは氏の教授資格取得論文のテーマでもある。また、本懇話会の報告においてもその核心が語られている。当日に配布された英文原稿は、すでにドイツ語で公表された論考とほぼ同一だが、結論部が新たに書き加えられている[1]。以下に当日の報告と参加者との討論を要約する。

まず、報告者は、梁啓超の著名な論説「新史学」を例に挙げながら、自身の方法論を次のように説明した[2]。従来の研究では、20 世紀中国知識人のテクストは、いかに中国史を近代的に記述したかが問われていた。その場合、研究者は、そうしたテクストが中国における民主的な国民国家建設に役立つかどうかを基準としてきた。しかし、報告者の立場は、むしろそうしたテクストがいかに世界史と関連づけられていたかを問うものである。19 世紀の間に、中国は東アジアにおける指導的な地位を喪失していった。もはや同時代の中国知識人にとっても、中国は世界の中心ではなく、世界のなかの一国民にすぎなくなった。それが当時の一つの合意であって、それを前提として世界における中国の位置を定義づけることが求められた。報告者は、ユルゲン・ハーバーマスの議論を援用し、「国民」とは、つねに特殊であり普遍である、と述べる。つまり「国民」は、そのエートスによって国際的コミュニティの部分となり、そのために普遍性の一部となるが、しかし同時に、他の国民と異質でなければならず、それによって特殊性が要求される、という。したがって、この見方によれば、中国の国民史は、他の世界と異なるものではなく、普遍のなかに特殊性を見出すか、あるいは特殊性のなかに普遍性を見出す努力となる。報告は、中国史を世界史へと結びつける 20 世紀中国知識人の歴史叙述を、この特殊性と普遍性を軸に論じるものである。さらに報告者は、中国における最近の議論の一つに、グローバリゼーションの挑戦のもとで、いかに中国史と世界史を関係づけるかというテーマがあるが、その主張は 19 世紀初頭から 20 世紀初頭に端を発する、と指摘した。

報告者は、20 世紀中国の歴史叙述を今文学派と古文学派に区分する。今文学派を代表する康有為は、普遍性を志向するものであり、彼によれば中国自体は異質でも特殊でもなく、むしろ徳による新たな普遍性の中心になることが望ましいと見なされた。この見方は、伝統的な中国世界観の連続であり、報告者は、現在、中国で語られ

る「和諧社会」論の起源にもなっていると指摘した。報告の冒頭で例として挙げられた梁啓超については、彼は、日本留学時代、さらに第一次世界大戦を経て、その思想を変化させたものの、結局は、その師であった康有為の思想に沿うものであり、普遍性から出発する今文学派に忠実であった、という。

これに対して、古文学派の代表格である章太炎（章炳麟）は、中国史における特殊性の発見に強い関心を持っていたという。彼にとって、歴史とは中国人がその特殊性を発見する場であり、その国民の本質が発散する場が歴史であった。その国民の本質は世界のどの人民ももつものであり、その自己の歴史を知ることによってのみ自己を意識し、それによってその特殊性を自覚するという。しかし、その本質は、他国の理論や方法を借りることによっては説明され得ない。その歴史は、その特殊な歴史から生じる特殊な理論と方法によって理解されるものである。これは、すべてが特殊性をもつということによって普遍性を帯びるということである。したがって、世界史は国民の特殊な歴史の総体であるとされる。

報告者は、普遍性を歴史叙述の起点とする今文学派と特殊性を起点とする古文学派の相違が、マルクス主義か非マルクス主義か、ということ以上に重要であったと主張する。そして、それが近代中国歴史叙述をめぐるドイツ・オーストリアにおける諸研究の主要な発見であるという。そのように指摘した上で、20 世紀の知識人の例として、傅斯年と郭沫若を挙げた。この普遍性と特殊性に基づいた整理によれば、前者は、中国の特殊性を科学という普遍性に立脚することで共通理解の基盤を見出し、後者は、スターリンの 5 段階発展論を中国に適用可能であると主張することで中国史と世界史を結びつけようとした、という。

さらに、中国史を世界史と結びつける方法論をめぐる最近の議論として、報告者は、中国社会科学院世界史研究所副所長（現所長）の于沛を例に挙げる。彼は、中国史を説明するには、中国のタームを使わなければ不可能であるという立場をとる。それを世界史に結びつけるには、中国バージョンの世界史が必要であるということになる。そこでは、中国は世界史のルーツとなる。これは、中国史を世界史と結びつける従来の主張と全く異なるものであり、中国を起点として世界史を描こうとするものである。それは中国史と矛盾しない世界史であり、国民国家体系としての世界史ではない。中国において、グローバル・ヒストリーを主張する論者は、マルクス主義者が多く、郭沫若もまさにその一人であって、それは普遍性を起点とする今文学派の流れに位置づけられる。それに対し、于沛は、中国の特殊性を主張し、特殊性を起点とする古文学派の流れに位置づけられる。これは、中国政府が、中国の性格をもったグローバル化を要求することと共通の出発点をもっている。

最後に、報告者は、世界史をめぐる議論は西欧の思想が主流であり、中国からすれば、その議論はヨーロッパ中心主義的と見える。中国におけるオルタナティヴな歴史の見方は、中国中心主義的な見方であり、その中国の特殊性もしくは普遍性を起点にすることで、自らの世界史の見方を創出した、と結論づけた。

報告者と参加者との間の討論の要旨は、以下の通りである。

まず、中国近現代史を専攻する久保亨氏は、ヨーロッパにおける中国学の長い伝統、とくに中国知識人に関する研究蓄積があること、その研究成果の全体像を日本の研究者が理解することの難しさを指摘した。そして、報告者が、1970 年代に中国での研究経験があり、当時、日本の研究者が中国現地で研究が困難だったことから、日本の研究者よりもドイツ・オーストリアの研究者の方が、70 年代に大学を卒業した于沛氏のような新世代の知識人をよく理解できるかもしれない、と述べた。その上で、自身のコメントとして、報告を非常に価値のある議論と述べたうえで、(1) 中国の特殊性と日本の特殊性の位置づけ、(2) 世界史とグローバル・ヒストリーのそれぞれの概念の位置づけ、(3) 于沛氏を例に挙げる場合の中国の学界における国家の影響について質問した。とくに、(2) については、世界史がときに国民史の総体になる一方で、グローバル・ヒストリーは人類史へと拡がる可能性があるのではないかと指摘された。

次に、ドイツ現代史を専攻する西川正雄氏は、特殊性が強調される歴史がしばしば国民史であることを指摘し、氏が責任者となった第 20 回国際歴史学会議のセッション「国民の叙述から市民の叙述へ」では、国民史の再構築を試みたことを紹介した。そして、世界史の理解を深めるために、個々の国民史を相対化する必要性を論じた。その上で、グローバル・ヒストリーに取り組む歴史家が、しばしば世界史を、まさに古代から現在まで一貫したグローバリゼーションの単線的な発展として解釈する傾向をもっており、そうした単線的な世界史観はロストウ流の近代化論か俗流マルクス主義と同様である、と述べた。氏は、世界史はもっと幅広い脈絡の中にある

という。そのように自身の見解を述べたうえで、「ドイツの特殊な道」論争を引き合いに出し、どのようにしてある歴史が普遍で、ほかの歴史が特殊と言えるのか、と質問した。

最初に、報告者は自身の理論モデルに補足説明を加えながら、主として、世界史とグローバル・ヒストリーとの関係について次のように答えた。まず「今文学派」は、普遍性のなかに中国を位置づけようとする。これは、普遍的な理論を適用することによって中国史を理解できるという立場であり、グローバル・ヒストリーの立場に近くなる。現在、グローバル・ヒストリーを主唱する知識人に正統派マルクス主義者が多い理由である。なぜなら、彼らはその理論をもって普遍性の立場をとるからである。次に「古文学派」は、中国史の特殊性を普遍的なものとして提示することに関心をもつ。どの国も特殊な歴史をもち、その点で中国は世界のどの国とも異なるところはない。それぞれが独自の歴史をもつ。それが普遍性となる。この「古文学派」は史料から理論を抽出する。理論から歴史は理解できないという立場である。歴史を国際的に叙述することも、中国を基点に拡張するものであり、その限りで世界史は特殊性をもつ国民史となる。その基本原則は、どの国も独自の学問分野のルールをもつということである。そして、史実と理論の結合ということも、マルクス主義の脈絡で共有される。「今文学派」と「古文学派」が使う普遍性と特殊性は、異なる抽象化のレベルに存在する。

次に、報告者は、この報告と「ドイツの特殊な道」論争が不可分の関係にあると述べ、西川氏の指摘が自身の簡潔な理論モデルへの政治的なインプリケーションの複雑さを明らかにするものであるという。

特殊性に立脚する側の政治的なインプリケーションについては、西川氏が指摘するように特殊性を志向する人々がナショナリズムの傾向をもつことは確かであり、1950・60 年代、中国のリベラルな歴史家は、特殊性を志向する見方を持っていたという。ところが、文化大革命によって自壊し、中国に内在するものへの希望が失われてしまった。しかし、それでも中国の民主主義に期待をもつ人々は、中国が特殊であるという見方から中国史を理解しようとする。報告原稿で、ハーバーマスを引用したのは、「ドイツの特殊な道」論争を念頭にしていたからである。もともとドイツでは、「特殊な道」論はきわめて右寄りの歴史の見方と結びついていた。しかし、ハーバーマスは、民主的な市民権をもつ社会を達成するためには、ドイツ人はドイツ「特殊な道」を選択しなければならないと主張する。

普遍性に立脚する側については、マルクス主義ではなく、新しい世界史的な見方を発展させようとする中国の歴史家は、道徳的な観点を強調し、中国が民主主義と消費社会と異なる社会を創りあげることができる可能性があると考える。しかし、西川氏が報告ペーパーから消費社会への傾向が含まれると読んだことは大変興味深い。その傾向は非常に強い。これらの知識人は、消費社会・議会制を含んだ道徳的なアプローチを持っており、だからこそ西洋観念と異なるオルタナティヴを必要とする。この西洋観念と異なるオルタナティヴの創出という点については、グローバル・ヒストリーであれ、世界史であれ、共通の目的となっている。

報告者自身としては、モデルを通じた解釈を志向しており、それはマックス・ヴェーバーに影響されるものであり、自身がハイデルベルク大学で学んだことと関係しているという。それは混沌に秩序を与えるための理念型の抽出であり、どの世代も自分たちのための新しいモデルを発明するものであると述べた。しかし、ポストモダニストと比較すれば、自身は、史料と結びついた理論から歴史を導き出すことができるという立場である、という。報告者によれば、個々人は、現在の喫緊の課題に対峙しながら、自己のモデルを創り出すことができるが、ポストモダニストと異なり、歴史を発明できるということではない。

そのほかに、中国の学界と国家の関係については、詳細は不明としながらも、于沛氏の事例については、「古文学派」の議論に沿うものであり、その歴史観は現在の中国政治エリート層の中国・世界関係に関する戦略的思考と同調していることは確かとする。しかし、報告者は、それは偶然的なものであって、中国社会科学院の研究者がつねに政府見解に沿うような研究を発表している訳ではない、と指摘した。

また、日本・中国のそれぞれの特殊性については、報告者は、ドイツ・オーストリアにおける東アジア研究が、中国・日本・朝鮮といった専門分野に区分されている現状があると指摘した。自身の教授の世代では、東アジアの枠で研究していたという。自身もウィーンの大学で教鞭をとるようになって以降、日本を理解することでより中国が理解できるようになったと述べた。

報告者の方法論は、決してヨーロッパ出自の歴史理論を中国の事例に適用しようとするものではない。報告者

は、中国知識人の思想潮流を普遍性と特殊性という 2 つの軸から整理したが、それはヨーロッパにおける概念をそれ以外の地域における事象に安易に適用することを避けうる理論的枠組みを探究した成果である。しかし同時に、報告者が「ドイツの特殊の道」論争を念頭に立論しているところに、自身の学問の出自が反映されているといえよう。この方法論の枠組みは、全く異なる出自をもつ史学史の比較を可能にするものではないかと思われる。本懇話会の討論で、最も刺激的であったのは、世界史とグローバル・ヒストリーをめぐる質疑応答であった。討論では、報告者は自身の立場をポストモダニストとの違いから説明されたが、自身のホームページの自己紹介では、この問いについて次のように明確に述べている。グローバル・ヒストリーと世界史をめぐる論争のなかで、自身は、アーリフ・ディルリク（Arif Dirlik）と同様に、「歴史の普遍性はそれぞれの特殊性の総体であり、したがって歴史学の中心的な関心はわれわれにそれぞれの特殊性を認識し、跡づけ、そして全体の部分として理解することが可能になる道具を発達させることでなければならない」との立場であると（http://www.univie.ac.at/Sinologie/staff/weigelin-s/）。

注）

[1] Weltgeschichte und chinesische Geschichte. Die chinesische Historiographie des 20. Jahrhunderts zwischen Universalität und Partikularität, in: Margarete Grandner/ Dietmar Rothermund/ Wolfgang Schwentker (Hrsg.) Globalisierung und Globalgeschichte, Wien: Mandelbaum Verlag, 2005, S. 139-161.

[2] 梁啓超が創刊した『新民叢報』第 1 号（1902 年）より分載された。梁啓超『飲冰室合集』中華書局、1989 年、第 1 冊（9）、1 ～ 32 頁に再録。

第 4 回世界史懇話会報告（補足）

南塚 信吾

2007 年 1 月 15 日にウイーン大学東アジア学科の S・ヴァイゲリン教授を迎えて、世界史懇話会を、法政大学において開催した。ヴァイゲリン教授は、近現代の中国史・中国歴史思想を専門にしておられ、その観点から、中国の近現代の歴史思想において「世界史」あるいは「グローバル・ヒストリー」が方法論的にどのように位置づけられてきているかを、論じてくださった。講演の中心的な論点は、以下のとおりであった。

中国史のなかには、中国史に特有な個性 particularity よりも普遍的な要素 universality に重点を置いて中国史を考え、ひいては「グローバル・ヒストリー」を考える流れがある。たとえば、梁啓超（1873–1929 年）がそうで、彼は、始めは康有為（1858–1927 年）の影響下で中国の伝統に基づく近代を考え、ついで西洋思想に基づく世界を考え、そして第一次世界大戦後は東西の価値（科学と道徳）の総合による世界を考えた。その後、傅斯年（1856–1962 年）が科学という観点からユニヴァーサリズムを論じ、郭沫若（1892–1978 年）はマルクス主義の普遍主義をもって中国史を「グローバル・ヒストリー」の中に位置づけようとした。マルクス主義によれば、世界の各地・各国で発展段階があてはまり、中国は単に「遅れて」いるだけなのだということになる。

他方で、中国史のなかには、中国史に特有な要素（エッセンス）を機軸とした中国民族史（国民史）をもっぱら考え、したがって、世界史をば個別ネイションの歴史の合計（sum）と考える流れがある。それは章太炎（1868–1936 年）に代表されるような流れである。かれは、歴史は民族的エッセンスの核心であると考え、儒教を軸とした中国史を構想した。マルクス主義のなかでも、中国史の特殊性を重視し、愛国心を育成しようとする翦伯贊（1898–1969 年）のような人も現れ、理論的な諸原理（論）と具体的な中国史（史）の関係を問題にするようになった。

毛沢東主義の初期においては、particularity と universality の問題は、以下のように論じられた。中国は 19 世紀において他の発達した国々と同じような発展の道を歩んでいて、いわば世界史の発展に歩調を合わせていたが、帝国主義がこの発展を遅らせた。また農民が多数であるということも、発展を歪めさせた。しかし、中国の独特の道である「新民主主義」はこうした歪みを是正して、世界史の発展に中国を組み込み、世界的な規模での社会主義の確立に向けて中国を進めるはずである。

人民中国になってからも、particularity と universality の問題は続いた。1950 年代にはソ連の世界史の影響で、マルクス主義の発展の 5 段階という考えが広がったが、中ソ関係の悪化に伴って、これは放棄された。そして、文化大革命を経て、世界史がまた議論されるようになった。そこでは「ヨーロッパ中心主義」が問題となり、それに対する概念として「多元論」が対置され、その観点から個々のナショナル・ヒストリーの総体としての世界史という考えが、ふたたび提起された。

最近は、グローバリゼーションとその中での「ヨーロッパ中心主義」に関連して、世界史における particularity と universality の問題が議論されている。歴史家たちは、中国史を取り込んだ世界史を記述することを、したがって、世界史を中国語のタームで記述することを主張している。現在のグローバリゼーションは、「ヨーロッパ中心主義」を克服し、中国史を全体の中でしかるべく位置づけるために良い機会であると考えている。

特集「世界史教育は不要か」緊急アンケートを読んで＊

松本 通孝

2006 年秋の「世界史未履修問題」は、全国の世界史担当教師にとって世界史教育を原点に立ち戻って考え直す良いきっかけになったと思います。

世界史研究所「ニューズレター」第 9 号の緊急アンケートは、いろいろな角度からの分析・提言に富んでおり、教えられるところ大でした。アンケートでは、二人の現場の教師の声しか紹介されておりませんでしたので、私立大学併設校教師という違った視点から、アンケートについての感想を述べさせていただきたいと思います。

「歴史的思考力」と「基礎知識」について

まず二人の現場教師の分析は、同じ教師として共感するところ大であった。崎山氏の「大学・社会が、世界史必修の必要性を認め、受験の必修科目として扱わない限り、名目上の必修に留まる」という現状分析。更に、世界史教育に実際に携わっている鳥越氏により「受験に関係ない教科は学びたくない」という生徒の立場からの現実論が紹介され、だからこそ、「全国の高校生が世界史を学ぶ意味があるのか」「あるとしたら、どのような意味においてか」と世界史教育の本質を問う方向が提示されている。

現実の高校における歴史教育の場では、鳥越氏の言われるように「流れを理解する」を含めての「歴史用語暗記主義」から脱却出来ていない。大学入試だけでなく、「歴史的思考力」を中心とする授業を試みる際にも「基礎知識」が絶対に必要だからである。冒頭で、南塚氏は、「歴史的思考力を養うには、現代についての主体的な意識から、それをどう解決するかを考え、そうした ‘ 方向感覚 ’ から過去と ‘ 対話 ’ することが、歴史的思考力ということなのである」と説かれている。しかし、「歴史的思考力」と「基礎知識」の連関については、触れられていない。

私の勤務校は、大学併設の一貫校である。私たちのような学校が集まり、「全国私立大学附属・併設 中学・高等学校 教育研究集会」を年に一度開いている。そこで常に問題となるのは、鳥越氏のアンケートに出てきた「受験に関係ない教科は学びたくない」、言い換えれば「受験があるから一生懸命学ぶ」という生徒のモチベーションがないことである。確かに、内部推薦の脅し？により、授業をまじめに受けさせるという側面はある。しかし、本質的には、受験のためではない授業の工夫に取り組まざるを得ない。世界史の面白さ、歴史的に物事を見ていく面白さを前面に出さない限り、授業は成り立たない。

そのような意味でも、大学附属・併設校の先生方は、思い切った授業実践を試み、その失敗例、成功例を公にすることにより、歴史教育全体に寄与できるのではないかと思い、自らの怠慢さを反省している。昨秋の大会では、総合学習との絡みで、卒論指導という方向を打ち出したいくつかの学校の報告が印象的であった。

「現代史」という新しい発想は？

次に、南塚氏は、日本史と世界史の一体化について、「世界史の中に、日本史を取り組んだ ‘ 世界史 ’ あるいは、日本史の中に世界史を取り込んだ ‘ 世界史 ’ が必要であると思われる」と説かれ、また、澤野氏も日本史必修論の高まりに対して「近代以降の日本史と世界史を融合した新科目の創設」を説かれている。

私は、我が校での「現代史」（文科省には「日本史 A」として届けている）教育の実践の中で、世界史の中に日本を位置づけ、日本を中心とした近現代史教育が可能であることを確信している。教科書はいろいろ工夫はしているけれど、日本抜きの世界各地域の近現代の流れを重視した「世界史 A」、一国史的に日本の近現代史を学ぶ「日本史 A」では、見えない面が多すぎるのではないか？特に、現代に生きる生徒たちの欲求に応える「日本史」「世界史」になっているのだろうか？私は、指導要領が改訂されつつある現在、既に遅きに失しているが、2 単位で、B の科目の近現代だけを切り取ったような現在の「日本史 A」「世界史 A」は廃止して、世界と日本の近現代史を扱う「現代史」という科目の創設を強く願わざるを得ない。世界史教師が日本史教師に教わり、またその逆も。そうすることによって、教師の歴史観自体にも新しい発見があるはず。生徒にとっても、ただ単に、「世界史」「日本史」という科目があるから学ぶという姿勢に対し、南

塚氏、鳥越氏が言われるように現代に視座を置くことにより、現在の問題関心と繋がる現代史の捉え方という方向で、歴史的思考力を養いながら、基礎知識を習得するという方向に一歩でも近づけるのではないだろうか？

世界史未履修問題を機に、文科省、教育委員会、各都道府県の私学部を中心に、学習指導要領通りに教育課程が組まれているか、またその内容のチェックまでしようとする方向が強まっている。私は私学の教員として、私学の独自性を大切にする中で、自分たちが創り上げて来、また創ろうとしている歴史教育を自信を持って進めていきたい。その意味で、歴史教育に当たる教師自身がより良い歴史教育を創りあげて行くべきとする西川氏の「世界史未履修問題について」という文章には大いに力づけられた。これを機会に、本研究会でも世界史教育についての議論が深まれば、幸いと思います。

---

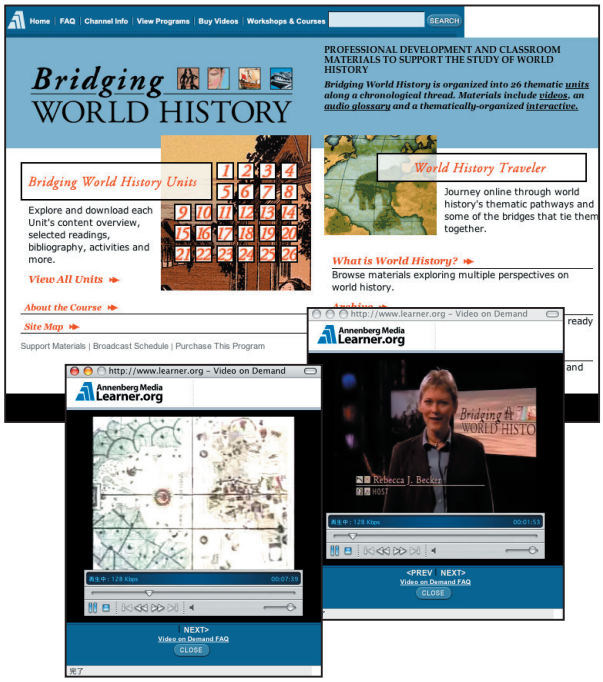
* 本稿は、2007 年 1 月 31 日付けで世界史研究所ウェブサイトでも配信しています。
http://www.history.l.chiba-u.jp/~riwh/japanese/index.php?itemid=113

Web 世界史

毎回 Web や CD-ROM など電子化された世界史研究情報を紹介していきます。
世界史研究所のウェブサイトにもここで紹介したものを掲載しています。

Bridging World History

http://www.learner.org/channel/courses/worldhistory/



▲「Bridging World History」
http://www.learner.org/channel/courses/worldhistory/

今回紹介するウェブサイトは「Bridging World History」です。これはアメリカのアネンバーグ財団が運営する Annenberg Media のコンテンツのひとつです。Annenberg Media では教育者の質の向上を目指して、ビデオやウェブコンテンツによるマルチメディア資料の提供を行っています。「Bridging World History」は特に世界史の授業を行う教師を対象とした専門能力開発や学校用教材の配信を行っています。

コンテンツの中心となるのは、教師向けに作成された全 26 回のテーマ別の世界史講座です。たとえば、第 1 回目は「Maps, Time and World History」と題され、歴史家が空間と時間をどのように設定するかを知ること、世界史の全体的枠組みを理解することが目的とされています。ここでは、時代や文化によって時間と空間のとらえかたが異なることから変化と持続性を探求すること、製図技術・技法に注目し、それが人類の世界に対する認識に与えた影響を検証すること、諸社会集団ごとに時間と時代区分の概念が異なることを比較し、文化と知の発展を議論することが課題として設定されています。

このほか「歴史と記憶」や「人の移動」「農業と都市の革命」「土地と労働の関係」「グローバリゼーションと経済」など多様なテーマで世界史を理解しようとする試みがなされます。各回それぞれのテーマに応じてに、参照すべき文献リストやウェブ上で見ることができる論文が紹介されているほか、図像・音声資料の紹介があります。そして、各回のテーマを映像化した 30 分程度の動画をウェブ上で閲覧することができます。動画の閲覧には Windows Media Player が必要なほか、初回のみメールアドレスやプロフィールの登録が必要ですが、登録後は無料で全てを見ることができます。動画も各テーマにひとつづつ、全 26 回分ありますので、動画を全て見るだけでもかなりの時間がかかりますが、歴史資料を使った講義や歴史研究者へのインタビューをオンライン上で見ることができる興味深い内容となっています。

同サイトではこの他にも教材として利用可能な図像・地図約 1500 点のデータベースを提供しています。教師向けの専門能力開発としても、歴史を専攻する学生向けの教材としても参考になるものだと思います。日本でもこのようなインターネットを利用した教員向けの教材配信サイト、学生向けの入門講座的なサイトは既にいくつか存在していますが、世界史に限って言えば十分な質と量を提供できてはいないのが現状でしょう。しかし、個人の中学校・高校教師の方が講義録を公開したり、社会科教育に有用なサイトのリンク集をまとめておられ、これらは非常に参考になります。簡単に紹介して今回の WEB 世界史を終わりたいと思います。

●**「歴史へのいざない」**http://www2.ttcn.ne.jp/~kazumatsu/
松本一夫氏のサイト。自身が行ってきた日本史・世界史の授業実践について紹介されている。

●**「世界史講義録」**http://www.geocities.jp/timeway/
金岡新氏のサイト。自身の高校世界史の授業全 96 回を公開している。

●**「社会科リンク集」**http://shakai.edu.shimane-u.ac.jp/1192/
飯國信行氏のサイト。社会科教育に役立つサイトや資料へのリンクがまとめられているほか、教材としてのインターネットについての考察などがある。

世界史研究所からのお知らせ

世界史研究所ウェブサイト移転のお知らせ

コンテンツの拡充にともない、これまで世界史研究所のウェブサイトを設置してきたウェブサーバーが手狭になってきたため、研究所ウェブサイトを移転することにいたしました。移転先は千葉大学文学部史学科西洋史研究室のサーバーです。

ウェブサイトのアドレスが下記のとおり変更になります。

旧）http://www.npo-if.jp/riwh/

↓　変更

新）http://www.history.l.chiba-u.jp/~riwh/

２ヶ月程度の移行期間中、旧ウェブサイトへのアクセスは自動的に新アドレスに転送されるよう設定しております。移行期間終了後は旧ウェブサイトは閉鎖されますので、「お気に入り」「ブックマーク」の登録を変更下さいますようお願いいたします。

NPO-IF 世界史研究所

〒 150-0002　東京都渋谷区渋谷 2-17-3　渋谷アイビスビル 9F　TEL：03-3400-1216　FAX：03-3400-1217
E-mail：world_history@npo-if.jp　URL：http://www.history.l.chiba-u.jp/~riwh/